

「楽」——西洋思想より

小山宙丸

(一) エピクロス

楽という字は、弦楽器、または弦楽器を爪で打つこと、がもとの意味でそれから音楽、もしくは音楽を奏するという意になり、そこからたのしむという意味になったという。(角川漢和辞典による)さらに楽は伯樂、千秋楽、樂燒、極樂などさまざまな意味で使われている。しかしここではたのしむという系統の意味で考えることにする。この系統の意味が用いられるときは、楽はラクと発音されることが多いようである。この意味のとき一字で用いられることもあるが、二字で多くの熟語を作っている。例えば、思いつくままにあげてみると、安楽、氣楽、苦楽、怡楽、快樂、歡樂、享樂、至樂、娛樂、道樂、樂易、樂樂、樂觀、樂天、樂園、樂土など多数にのぼる。たのしむ系統の意味(たのしい、よろこ

ばしい、心になう、やすらか、ゆたか、たやすい、やさしい)でとらえた場合、このような言葉はヨーロッパではどのように考えられ、評価されているであろうか。

このような種類のたのしさの考え方が、あらゆる倫理思想の中で、何らかの場所を占め、ある程度の評価を得ているかどうかは、当然予想しうることである。この概念は倫理学上の重要な考え方の一つだからである。禁欲主義的な学派といえども、質の違いを認めれば、たのしさの概念は存在しているといえる。しかしここではこの種類のたのしさを人生観上、あるいは世界観上の最高の価値とする考え方について、少しふれてみたいと思う。古代ギリシアのヘレニズム時代に、エピクロス(前三四一—二七二)を創始者とするこのような学派が存在したことは周知のことである。この学派は創始者の名前をとってエピクロス主義(Epicureanism)、

または快楽主義 (Hedonism) とよばれている。この快楽主義という訳語は、ギリシア語の *hēdonē* からきているが、エピクロスの教説を考へるとき、これはかならずしも適切な訳語とは思われないのである。それは日本語ではこの快楽の語が、かなり悪い意味で使われることが多いからであるが、しかし慣用としてこの語が用いられるので、ここでもその例にならうことにする。

ヘレニズム時代は思想的には倫理的時代とよばれることがある。アリストテレスの死 (前三三二) とともに哲学の古典主義が終りを告げて、局面がすっかり変り、思想の新しい時代がはじまった。その特徴は古典時代の体系的、理論的、組織的、観念論的、思弁的であるのに対して、新時代は実際的、実践的、実用的、唯物論的、感覚的であった。後者の時代の代表的な学派は、ストア学派、エピクロス学派、懐疑論であろう。これらの学派のうち、前二者は禁欲主義、快楽主義ともいわれるのであるが、同時時代の代表的な二学派が正反対の方向をさし示すというのは、興味ある現象である。しかも両学派とも、この時代からローマ時代にかけて学説が創出され、その後現代に至るまで欧米を代表する二大倫理学説として広く受け入れられ、多くの欧米人の人生観、世界観の形成に多かれ少かれ寄与するようになるほど愛され、親しまれるものとなっていることは、今更ふれる必要もないことであろう。両学派とも文献としてはローマ時代ものがほぼ完全な形で残り、エピクテートス、マルクス・アウレリウス、あるいはルクレティ

ウスは多くの人々の枕頭の書、あるいは愛読書となっていることも、くわしく述べる必要のないことである。

ストア派とエピクロス派が正反対の結論に達したというのも恐らく出発点是非常によく似ていて、両者とも感覚重視なのである。感覚重視から出発して、それを否定するか肯定するかによって次第に両者の考え方に距離ができていったと考えられるだろう。従って結果が極端に違うほど、考え方に相違があるのではないといえるのである。感覚の肯定といっても、その肯定の仕方にさまざまの違いがある。その直接的な肯定をいうならば、むしろ小ソクラテス学派のキユレネ派の方がふさわしいだろう。そして快楽主義という言葉も、より直接的な、より刹那的な感覚、肉体の快楽を考へているこの学派にあてはまるように思われる。

エピクロスの考へている快楽はもう少し地味であるように思われる。例えば次のようにいう。「粗末なスープでも、空腹の苦痛をすべてとり除く時、贅沢な食事と同じような快楽を我々に与え、パンと水も、空腹の人が食べる時、考えられる最高の快楽を我々にもたらずのである。」(Diogenes Laertius, X, 130-131) また次のようにもいう。「快楽が目的であると我々がいう時、ある人たちが無知であったり、反対したり、誤解してうけとって考へるように、それは贅沢な人の快楽や放蕩の快楽をいうのではなく、身体に苦痛がなく、心にも苦しみのないことをいうのである。」(Ibid., X, 131) このようにエピクロスの考へていた快楽 (ヘード

ネーは、逆にある意味ではストイックと見られかねないほど質素なもので、水とパンさえあれば、ゼウスと幸福を争いうるほどのものである。(cf. *Sententiae Valerianae*, XXXIII) ところがこの時代の哲学は、理論的問題より人生的問題に傾むいていたことを述べたが、そういう観点からみるならば、現在残されているエピクロスのわずかの文章や断片の中には含蓄ある、滋味ある言葉が満ちている。しかしエピクロスの考えていた快樂がいかに地味なものであるとしても、快樂を第一のものと考えていたことは明瞭である。「快樂は幸福な生活のはじめ(アルケー・原理)にして終り(テロス・目的)である。」(D.L. X. 128)と、また「快樂は第一の天与の善である。」(ibid. X. 128)などとはっきりと表明しているからである。さきに述べたように快樂という訳語にやや問題が残ると思われるのであるが、エピクロスの快樂(ヘードネー)尊重の考え方を見誤まることはできない。

以下少しくエピクロスの特徴ある個性的な見解を述べてみたい。ストア派の目標としたところが没感情(アパテイア・*apatheia*)であるのに対して、エピクロス派では心の安静(アトラクシア・*ataraxia*)や心の自由(エレウテリア・*eλευθερια*)を到達すべき目的としていたことはよく知られている。そしてこのような目的のためにもっとも重要なものとして考えられているのが識見(プロネーシス・*prohairesis*・思慮・分別)である。「というのは快樂な生活(*εὐδαιμονία*)を作り出すのは、連続的な飲酒や饗宴で

はなく、少年や婦人の享樂でもなく、贅沢な食卓が供する魚類その他のものでもなく、冷静な知的判断(ネーポーン・ロギスモス・*νήπιον λογισμός*)であり、それによってすべての選択と回避の原因を探し出し、極度の動揺が心をとらえる臆見を追い払うことである。」(D.L. X. 132)とエピクロスはのべている。このような観点から「人間の苦惱(パトス)を少しも治さないような哲学者の言葉は空しい。というのは身体の病気を除くことができない医術には何の効目もないように、同じく哲学も、もしそれが心の苦惱をとり除けないならば、何の効目もない。」(Fr. 54, Bailey, Epicurus)というように哲学に対してすばりと裁断を下している。そこから「それゆえ哲学よりもいっそう貴重なものは識見(プロネーシス)である。」(ibid.)ということがいわれ、「しかもこれら一切のことの初めにして最大の善きものは、識見である。」(ibid.)と結論のようにいわれることになる。このようにいわれるのは、何ものにもとられない自由な心をもっているからである。彼がこのようにいう理由は、識見、分別、思慮こそが、幸福な生活、快適な生活を実現する根本的な条件と考えているからである。従って「賢くまた良くそして正しく生きることなしには、快適に生きることとはできず、快適に生きることなしには賢くまた良くそして正しく生きることとはありえない。」(ibid.)ということが可能になり、快樂と道徳との結びつきが明らかになる。さらに「いろいろな徳性は快適な生活とともに生じ、また快適な生活は

いろいろな徳性と離れてはありえない。」(ibid.)ともいう。このあたりの考え方は、徳性を重んじたキュニコス派やストア派の教説にかなりの程度近寄っているといえる。しかし違う点はキュニコス派にとっては徳が目的であるのに反して、エピクロス派にとってはやはり快楽が目的であって、徳は快楽にとって健康のための医術のような位置にある。けれどもそうはいっても徳は快楽にとって不可欠のものであるという。(cf. op.cit. X. 138)

さきにエピクロスの快楽とは「身体に苦痛がなく、心にも苦しみのないこと」という言葉を引用したが、この二つのもののうちエピクロスがより尊重するのは、後者の心の安静である。「自足」(アウタルゲイア・*autarkeia*)の最大の果実は心の自由である。「(S. V. LXXVII) とらぶ、「もともとも純粹な安固な」(アヌパレイア・*anupaleia*)は、心の平静(シウキア・*housia*)とまた多くの人から離れ去ること。」(*Kopiat doxai*, XIV.)と語つてゐる。

エピクロスは自然研究にも重大な関心をもつてゐて、現在残されている彼の文書の中でも自然研究はかなりの多くの部分を占めている。しかしこの場合も自然に対する純粹な理論的関心というのではなく、彼自身がピュトクレスへの手紙の中で、自然研究の目的は「心の安静と確固とした信念」をうることにほかならないと語つてゐる。(cf. D.L. X. 85)「なほ人生観および賢者の思徳におつて、エピクロスがキュレネ、キュニコスの両派とも、またとくにストア派とも一致してゐる一つの点は、自然(*physis*)の尊重

ということである。」(岩崎勉『ギリシア哲学思想史』(二)四三九頁)「空しい臆見に従わずに、自然に従う者は、すべてのことにおいて自足している。」(Fr. 5)「恵み多い自然に感謝しなければならぬことは、必要なものは簡単に手に入れることができるようにし、手に入りにくいものを不必要なものとしてくれたことである。」(Fr. 67)

エピクロスは愛(ピリア・*philia*)を非常に尊重していた。ディオゲネス・ラエルティオスの書いた伝記によれば、すべての人々に対する人間愛をもち、とくに祖国に対する愛と神神に対する敬虔さは、言葉で言い表わせないほどであったという。さらに両親に対する感謝の念や、兄弟に対する親切さや、召使に對するやさしさをもつてゐたという。(D.L. X. 10)しかしこれらの愛の中で、彼がもっとも重要なものと考えてゐたのは、友愛であつて、「知恵が作り出すものの中で、全生涯に至福を与えるものは、友情の獲得である。」(K. 4. XXXVII)と語つてゐる。そして次のような友情に対する讃歌を唱へてゐる。「友情はわれわれすべてに、至福な生活に目覚めるように呼びかけながら、世界をめぐつて踊つてゐる。」(S. V. LIH)

参考書

C. Bailey: Epicurus. The extant remains. Oxford. 1926.

Diogenes Laertius: Lives of Eminent Philosophers. X. Loeb.

1950.

Epikur: Briefe, Sprüche, Werkfragmente. Reclam. 1980.

出隆・岩崎允胤氏訳『エピクロス』岩波文庫、一九五九年。
岩崎勉『ギリシア哲学思想史』(下) 早大出版部、一九八二年。

(二) ギリシア宗教の諸遺産

上の章で快楽を人生の目的として真正面に据えたエピクロスおよびその学派によって、ヨーロッパの楽の思想を代表するものとし、その教説をきわめておおづかみに概観することによって、欧米の楽の思想の根拠と構造をみたのである。それはそこでもふれたように、おだやかで暖かみのある考え方によって、その学派はエピクロスの園とか、花園の人々、あるいは花園から来た人々と呼ばれたのであった。そして学派としては比較的長く続いたのちに亡びたが、エピクロスを尊敬し、かれに愛着をもつ者は現代にいたるまで、絶えることがなかった。エピクロスの書いた書物もかなりの量にのぼるのであるが、それらの多くは散佚して、わずかしか残されていないが、ローマ時代の詩人哲学者ルクレティウス (Lucretius, 98-55 B.C.) がエピクロスを神のごとく尊敬し、『自然論』(De rerum natura) を書き、エピクロスの思想を祖述した。この作品がほぼ完全な形で伝えられ、この作品によってエピクロスの生き方は後世に伝えられた。この書のアラビア語訳はいつの時代にも絶えることがない。おそらく殺伐な人間社会に、その思想がオアシスのような安らぎを提供するからであろう。

つぎにギリシア人、それをうけついでヨーロッパ人が実際にど

ういうものに楽しみを見出したのか、どういう楽しみをつくり出したのかをみてみたいと思う。まず手はじめにスポーツからみてみたい。スポーツをギリシア起源のものというならば、グレコフイルの我田引水がまたはじまったと考えられるかも知れない。しかし現在のスポーツ界におけるオリンピックのもっている重要な意味を考えた場合、ギリシアのオリンピック祭の競技がスポーツの考え方に与えた影響の大きさを否定できないだろう。それはとくにスポーツの品位にかかわるもので、ときには気高さともいふべきものをも生むようになったのである。それを支えているのはスポーツ精神、スポーツマンシップの高さで、それを創り出したのはギリシアのオリンピック祭の競技であろう。その競技はオリンピック祭の行事の一つとして行われたもので、宗教的祭事である。宗教的祭事であることが、競技の質に影響している。ヘロドトスに次のような記事がある。

少数のアルカディア人が「ギリシア人はいまオリンピック祭を祝っていると、体育や馬の競技を観覧している」と答えた。この時アルタバノスの子トリタンタイクメスが実に見上げた言葉を吐いたが、それがクセルクセスからは臆病者との譏り(そと)を蒙ることになった。すなわち彼は競技の褒賞が冠で金品でないことと聞くと黙っていることができず、満座の中でこういったのである。

「ああマルドニオスよ、そなたはわれらをよりにもよって、何たる人間と戦わせようとしてくれたことか。金品ならぬ

榮譽を賭けて競技を行なう人間とは。」(ヘロドトス『歴史』
卷八、二六、(Herodotus, *Historiae*, VIII, 26. 松平千秋氏訳に
よる)

なおこの中に出てくるアルタバノスの子トリタンタイクメスと
マルドニオスとは、ダレイオスの兄弟の子でクセルクセスには従
兄弟に当るものたちであるという。ここにもはつきりと金品では
ない、オリヴの枝の冠という名譽のためにあらそう競技に對す
る評価があらわれていると思う。

今日ギリシア文化の遺産の多くのもの、例えば神話、悲劇、彫
刻、ホメロスの叙事詩などが同時にギリシア宗教の遺産でもある。
ギリシアの宗教はギリシアの文化とともに亡びたといえよう。し
かしギリシアの宗教は亡びても、ギリシアの神々は神話という形
で残り、現在は世界中に広まり、子供たちを含めて、広汎な人々
に愛されている。ギリシア悲劇もギリシアの宗教的祭事のなかの
一つの行事として上演されたものであった。現在は演劇・芝居と
して上演され、宗教的行事ではない。しかし演劇作品として同じ
く世界的な普遍性を獲得している。ギリシア彫刻は人体を忠実に
模写したものと、感情移入的な、具象的な彫刻の代表的なもの
との評価を得ている。しかしそれらの彫刻の大多数が人間を彫
つたものではなく、神々の像である。けれども現在ではやはり宗
教的崇拜の対象としてではなく、秀れた芸術作品として、美の対
象として觀賞するものとなっているのではないか。ホメロスの叙

事詩はいろいろな役割をになわされていた。そしてその一つの重
要な役割は宗教的聖典としてのものであった。しかし現在ではや
はり宗教的役割をとかれて、世界におけるもっともすぐれた長篇
叙事詩として、文学的评价によって愛読されている。

以上の四つものは宗教上の対象として生れたものが、転化し
て芸術作品として残った例として考えられる。さらにギリシア文
化の重要な遺産の一つとして哲学(愛知)のことを考えてみる必
要がある。われわれ日本人は立場からいって、東西の学問の思想
を知りうる状況におかれている。我々がその文字を使用している
中国の思想において、学問がいかに考えられているか、を知るこ
とができる。それは我々のおかれている立場から、おのずから生
れてくる利点である。しかし今日我々が考えている学問の考え方
は、たとえ文字は漢字を使っているとしても、内容としてはギリ
シアから由来し、欧米に現在にいたるまで創造的に活動を続けて
いるそれを意味するだろう。そしてそれはギリシアに哲学として
誕生したものの展開である。今日我々は六歳になれば学校へ通う
ということは自明的と考えている。九〇パーセントを越える少年
少女が高等学校までゆくのであるから、彼らは一二年間はいかに
木の椅子にすわる。さらに青年の三人に一人は大学に行くのであ
るから、少なくとも四年間は木の椅子の生活を継続する。これら
は学問の思想の普遍性と、その普遍化された状況を語っている。
その学問の思想のみなもととなったのがギリシアの哲学である。

哲学を狭義に考えた場合、その哲学はギリシアに生れたのである。何故ギリシアに生れたのか。決定的な答えを見出すのは困難であるが、ある程度の理由を考えることはできる。哲学の誕生は神話的思考からの解放であるといわれる。このことに間違いはないが、この場合神話からの継承の面をも、あわせて考えてゆかなければならない。つまりそれはギリシア神話の神々を、豊かな同時に精緻な構想力でそれぞれ典型にまで仕上げたその力である。その力が概念や思考を扱う哲学を対象とした時にも發揮されたのである。世界中の人々に愛されているような実在感のある神々の像をつくり出したギリシア人の構想力が、哲学の場合にも概念や観念（イデア）に実在性を与えたのである。神々と人間とを比べる時、人間の存在は神々が不死であるのに対して、陰のようなものにすぎないが、それと同じようにイデアと比べた場合、この現実世界はそれのたんなる現象にすぎないのである。概念世界にこれだけの実在性をもたせれば、学問は机上の空論にならず、また現実の色あおぎめた投影にすぎないものにもならず、現実世界を創造し、またはそれを変革する力をもつ設計図としての役割をにないものとなる。キケロは最初の哲学者の一人であるピユタゴラスについて次のような話を紹介している。

レオンはピユタゴラスの才能と雄弁に驚いて、彼がもっとも信をおいている技術は何かと、彼にたずねた。するとピユタゴラスは自分としては精通している技術は何ももっていない、

しかし私は哲学者であると答えた。レオンはその言葉の新奇さにびっくりして、哲学者とは何者か、世間の他の者どこが違うのか、とたずねた。ピユタゴラスは人間の生活はお祭りに似ているように思われるとして、次のような話を語って答えたのである。——我々はいろいろな町から雑踏しているお祭りにやってくるように、同じように我々は他の生活や境涯を捨てて、この人生に入ってくるのである。そしてある人たちは野心の奴隸であり、ある人たちは金銭の奴隸となる。けれども特別なごく少数の人々がいて、その人たちは他のすべてのことを無視して、ただ自然だけを綿密に調べる。人々は彼らを知恵の追求者 (*sapientiae studiosi*) と名づけた。というのはこれが哲学者の意味なのである。——人生において自然の観察と発見が、あらゆる他の追求を圧倒してしまったのである。(キケロ「ツスカム談話」五、三、*Cicero, Tusculanae disputationes, 5. 3.*)

さらにもう一箇所アリストテレスから哲学の性格をのべている著名な箇所を引用してみたい。

従ってまさにその無知からぬけ出すために哲学したのであるから、彼らがこのような知識を追求したのは、明らかにただ知るためであって、何かの利用のためにはなかつた。そしてこのことは、事実がこれを証明している、すなわちたんに生活のためにだけでなく、安楽な暮しやたのしい閑暇

に必要なすべてのものがほとんど備わった時にはじめてそのような識見（プロネーシス）が求められはじめたのである。

それゆえ明らかに我々は、この識見を他の何らかの利用のためにではなく、かえってちょうど他人のためにではなく自分自身のために生きる人を自由人というように、この学のみを諸学のうちで唯一つの自由な学であるとして、追求しているのである。つまりこの学だけが、自らのために存在している唯一の学なのである。（アリストテレス『形而上学』第一巻第二章、Aristotelis Metaphysica, A 982b 20—28.）

以上二つの引用を試みたが、いずれも新しく生れた哲学の性格をわざわざ語っているように思われる。それは、知識への燃えるような要求と、その知識の自己目的性、従ってその無償性である。

(二) 遊戯

以上きわめて簡単にではあるが、ギリシア文化の主な遺産のいくつかにふれてきた。それらはまた、亡びてしまったギリシア宗教の遺産でもあった。宗教の生んだものではあるが、彫刻、悲劇、叙事詩などは、芸術のジャンルに属するものである。しかし我々がこれらのものをとりあげた理由は、ギリシア人のつくり出した楽しみの実際をみるためであった。芸術が娯楽のうちの、もっとも高尚な部類に属することはいうまでもない。芸術の創作および

鑑賞は、美にふれることを目的とするもので、美が自己目的的なものでもありうることもくり返す必要のないことである。

スポーツは体育・健康の問題であるとともに、娯楽でもある。スポーツを行うことも観戦することもある。ギリシアのスポーツが宗教上の行事であり、オリウの枝の冠という名譽のために競技するというのは、スポーツに気品を与えたということは上にのべた。英語のジム(Gym)やドイツ語のギムナジウム(Gymnasium)の語源であるギリシア語の *gymnos* は「裸かの」という意味である。ギリシアにおいてオリンピック・ゲームは生れたままの裸で行われたということである。「より高く、より速く、より強く」(altius, citius, fortius) という標語があるが、ギリシアの彫刻などと考えあわせると、人間の身体の美しさに、もっとも早く注目し、それをもっとも尊重した民族の一つであつたらう。スポーツのルールというのは現実世界とは何の関係もない、そのためだけのものである。いわばスポーツのためだけの架空の世界をつくり出すのである。その上で正々堂々とたたかうのである。まったく無償の世界といつてよいであらう。現在スポーツ界も次第に有償的になりつつあるが、それはまた別の問題である。

現在、大学はレジャーランド化しているということがいわれる。しかし逆説的でないかたになるかも知れないが、学校の起源を考えれば、これはごく当然な当り前のことがいわれているのである。現在の学校 (school, Schule, école) という言葉の語源は、ギリ

シア語の *svolat* (leisure, spare time) であり、それがひまの意味であることはよく知られている。それがラテン語の *schola* になり、それから近代諸語が生れたのである。もう一つつけ加えると、研究 (study, Studium, étude) の語源はラテン語の *studium* であり、それは熱中、道楽などという意味である。従ってひまな時に、道楽として行うものが学問であり、研究であるということになるだろう。このことは学問や研究の本質を考えるための有力な手がかりになると思われる。つまりひまな時に楽しみとして行うもの、それは利益のため、野心のためではないだろう。そこにかんてくるのは、学問や研究の無償性である。それ自身のためにのみ行われるものなのである。今日学問や研究の変質がある。しかしそれは本来、それ自身のためだけに行われるという純粹さ、自由さをもつものであることは忘れられてはならないだろう。ひまな時に道楽として行うものとしては、学問・研究はもっとも優れた、高尚なものの一つではなからうか。結局民族の質はひまな時に道楽として、遊びとして、何をするか、にかかっているのではなからうか。

西洋における楽の問題として、まずその楽、快楽を人生最高の価値と考えているエピクロス派の教説にふれた。それをもって西洋思想の楽を代表させた。快楽をあらゆる倫理学説がそれぞれに評価するのであるが、それを典型的に評価する学説をもって代表させたのである。次に楽をもたらずものとして、ギリシア人が何

を考えたか、何を創り出したかにかふれたのである。これは必ずしもエピクロス派に結びつくものではなく、ギリシア民族の創り出したものとして考えた。楽をもたらずものとして、ギリシア人が何を創り出したかを考え、またそれらがもたらず楽の性質を分析することによって、ギリシア人が喜んだ楽しみみの性格を明らかにすることができる。

ところがそのようなものとして、上にとりあげたギリシア文化の遺産は、みな宗教がらみのものであった。ほとんどがギリシア宗教の祭事の遺産といえるようなものであった。しかし宗教は楽しみをもたらずものであるか。

しかしここにオランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ(一八七二—一九四五)の「ホモ・ルーデンス」(一九三八年)という書物がある。(ドイツ語版 Johan Huizinga, Homo Ludens, Vom Ursprung der Kultur im Spiel, Rowohlt, 1966) この有名な書物の冒頭と末尾にプラトンの『法律』の同一箇所引用が二度にわたってなされている。その引用箇所の一部を、ここに引用すると、

アテナイからの客人 わたしの言う意味は、真剣な事柄については真剣であるべきだが、真剣でない事柄については真剣であるなということ、そしてほんらい神はすべての淨福な真剣さに値するものであるが、人間の方は、前にも述べましたが、神の玩具としてつくられたものであり、そしてじつさいこのことがまさに、人間にとって最善のことなのだとい

ことです。ですから、すべての男も女も、この役割に従っ

て、できるだけ見事な遊びを楽しみながら、その生涯を送らなければなりません、現在とは正反対の考え方をしな

ね。(Platon, *Leges*, 803 C. プラトン『法律』森・池田・加来氏訳、

岩波全集版四三三四頁)

冒頭の方の引用のすぐあとで、ホイジンガは次のように述べている。「このプラトンの遊びと神聖なるものとの同一化は神聖なものを遊びと呼ぶことで冒瀆しているのではない。その反対である。彼は、遊びという観念を、精神の最高の境地に引き上げることによって、それを高めている。」(op. cit. S. 26. ホイジンガ、高橋英夫氏訳『ホモ・ルーデンス』五五頁、中公文庫)「こうして、祭式的形式をもつ行事と遊びのさまざまな形式とのあいだに大きな同質性があることが、明るい光で照らし出されるであろう。」(ibid. 同所)さらに次のように述べる。「遊びと祭式の本質的、根源的な同一性ということをまず受け容れさえすれば、清められた奉獻の場が根本的には遊びの場であることが承認できる。」(op. cit. S. 25. 同書五七頁)以上ホイジンガからの引用をいくつか試みたが、それらの考察によって宗教と遊びとの関係が明快に語られている。それらによって、ギリシアの産んだ代表的文物が、時代の経過につれて、その宗教が亡びるとともに、遊戯性の勝ったものに転化していったことを、はっきりとあとづけることができる。これは、それ以上はのぞめないような断定的な説明であるが、現代フラン

スの社会学者ロジェ・カイヨワはこのホイジンガに触発されながら、ホイジンガは聖と俗とをあまりにも同一視して、両者の違いを無視していると批判している。こういう批判は他にもありうると思う。しかしそのロジェ・カイヨワ自身がその著『遊びと人間』(LES JEUX ET LES HOMMES, 1958) の日本語版の序文の冒頭で「本書は一九五八年に出版された。これはシラーの予言的直観とJ・ホイジンガのみごとくな分析『ホモ・ルーデンス』のあとを受けつぐものである。」(多田道太郎・塚崎幹夫氏訳『遊びと人間』日本版への序文)とのべている。以てカイヨワに対するホイジンガの影響の強さが分るであろう。

ここで言及されているもう一人の詩人フリードリッヒ・シラーは、カントの影響下に美学、倫理学の個人的な論文を書いた学者でもある。そしてカイヨワのいうとおり、予言者的な洞察でもって、遊び(Spiel) が人間の至高の行為の形態でもありうることに、哲学的な根拠を与えたのである。「人間は語の完全な意味で人間である時にのみ、遊戯するのであり、また人間は遊戯する時にのみ真に人間なのである。」(フリードリッヒ・シラー『人間の美的教育について』第一五信 Friedrich Schiller, über die ästhetischen Erziehung des Menschen, 1795.)

(こやま・ちゅうまる、中世哲学・宗教哲学、早稲田大学教授)